慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南宋両淮江東転運司刊三史について
Sub Title	On the edition of San-shih 三史 (Shih-chi 史記, Han-shu 漢書 and Hou Han-shu 後漢書) published by Liang-Huai Chiang-tung Chuan-yun-ssu 両淮江東転運司 in Nan Sung 南宋 Dynasty
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1975
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.3 (1975. 2) ,p.25(125)- 58(158)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19750200-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南宋両淮江東転運司刊三史について

尾崎　康

宋刊の史記（集解）・漢書・後漢書の九行一六字本は、かねて蜀大字本といわれていたが、史記の一部の巻末に

左迪功郎充無為軍軍学教授潘旦校対
右承直郎充淮南路転運司幹辦公事石蒙正監雕

の二行の官銜があり、南宋初の洪邁（一一二三～一二〇二）の容斎続筆巻一四に（周蜀九経の条）、

紹興中、分命両淮江東転運司刻三史板。其両漢書内、凡欽宗諱並小書四字、曰淵聖御名。

とあるのに符合して、漢書と後漢書にしばしば桓字が「淵聖御名」とされ、また一部に高宗の諱の構字を「今上御名」としているところから、この三史が南宋紹興中両淮江東転運司の刊本であることには、ほとんど疑いの余地がなくなった。(1) しかし、巻中にはこの両字が末画を欠いた形で、それも埋木したかにみえて存する箇所もあり、また史記は淮南西路の刊であるにしても、両漢書を刊刻した漕司は明らかではない。これらの疑点は結局つきとめられないが、南宋前期の諸刊本を考えるのに資するところもあるかと思われるので、この三史に関する資料を提示し、一考しておきたいと思う。

一　史　記

史記は上海・北京両図書館架蔵の三本の存在が知られるだけであるが、それぞれの善本書目によれば、その存巻はつぎ

のとおりである。

存三〇巻 巻五・六・八～一二・一六・一七・三四～四〇・四八～五四・五六・九九・一〇〇・一〇七～一一〇　宋刻本　上海
一三〇巻　宋刻宋元明初遞修本　四〇冊　南海潘氏宝礼堂旧蔵　北京
一三〇巻　宋刻宋元明初遞修本　呉雲跋　六六冊　呉興劉氏嘉業堂旧蔵　北京
巻一～一〇・一三・一四・二一・二四・三一・三二・三四・三五・四〇～五五・
六八～七一・七九～九六・一〇〇～一〇三・一〇六～一一〇・一一四・一一五　計六七巻
配另一宋刻本　巻一一・一二・二三・二六・二七・三三・九七～九九・一〇四・一〇五・一一一～一一三・一一八～一二一　計一八巻
配元大徳刻本　巻二三　一巻　配明抄本　巻五六～六〇　計五巻
配清抄本　巻一五～二〇・二五・二八～三〇・三六～三九・六一～六七・七二～七八・一一六・一一七・一二二～一三〇　計三九巻

これらを実見する機会はまだ得ていないが、いずれにも解題そのほか多少の資料がある。

上海図書館蔵本は、北京図書館編の中国版刻図録（文物出版社・一九六〇年）の図版一〇七に巻八首半葉の書影が掲げられ、解題の二六頁につぎのように記されている。

史記集解　劉宋裴駰撰　宋紹興淮南路転運司刻本　南京　上海図書館蔵

匡高二二・三厘米、広一七・七厘米。九行、行十六字。注文雙行、行二十字・二十一字不等。白口、左右雙辺。建元以来王子侯者表・曆書・李斯列伝・樊酈滕灌列伝・匈奴列伝・滑稽列伝末葉後有　校対無為軍軍学教授潘旦、監雛淮南路転運司幹辦公事石蒙正銜名二行、但此書却非無為刻版。刻工与建康府江南東路転運司本後漢書、以及当塗・宣城等地刻書多同、宋諱欠筆至構字、間有避慎字者、因推知此書刻版実由南宋初葉南京地区工人担任。容斎続筆、紹興中分命両淮江東転運司刻三史版、即指此本。此書版片稍後取入臨安国子監、故別本補版都由杭州地区工人任之。元時　版送西湖書院、西湖書院重整書目中有大字史記一目、蓋即此本。此帙初印精湛、無一補版、惜僅存三十巻。

銜名の所在については宝礼堂宋本書録に基いたものらしく、巻二一建元以来侯者表第八であるべきところを巻二二の建元以来王子侯者表と同じように誤っている。なにより、この上海本はこの巻もそのほかもほとんど欠巻で、巻一一〇の匈奴列伝にだけ官銜が存するにすぎないはずである。刻工や欠筆については、後に三史を一括して再考したい。

それにしても、補刻がまったくないというのはみごとで、百衲本に用いられた北京図書館の後漢書が補刻のごくわずかな善本であるが、上海本はこれに優るものである。次に述べる北京図書館の二本や両漢書の各本はいずれも南宋中期に修補を受けているから、これはそれ以前の印本ということになる。初印精湛というのもさぞかしと思われる。

清の張金吾の愛日精廬蔵書志に、史記残本三十巻宋蜀大字本 として著録されているのがこの本らしく、巻次と行格が一致する。ただし、慎字を欠筆せず、孝宗以前の刊本であるという。

ついでその四〇年後の莫友之の宋元旧本書経眼録巻一に、史記集解 宋蜀大字本 上海郁氏蔵 として著録され、初印紙墨精潔というのは版刻図録の初印精湛に合うが、ここには存二十九巻とあって、巻三四（世家四）が落ちている。玄敬殷貞徴讓桓完貙等の字を避諱するが、やはり慎字は欠かないとする。毎巻に「当湖小重山館胡氏篋江珍蔵」印、巻九に「呉寛」「白小」「地山」「子孫保之」の四印、巻一一に「停有」「肇錫余以嘉之」「芙初女史姚畹真印」「勤裏公五女若衡」の五印があるという。

北京図書館の潘氏旧蔵本については、宝礼堂宋本書録に詳説されている。無為軍軍学教授潘旦校正と淮南路転運司幹辦公事石蒙正監彫の銜名は、前掲の六巻のすべてにあるが、その第一が版刻図録とおなじく建元以来王子侯者表とある。そして、百宋一廛賦注や愛日精廬蔵書志に蜀大字本と称されてきたものと同版としつつ、なおこれら前人の蜀刊説を否定しえないでいる。また、巻中に五種の版を含むとして、つぎのようにいう。

字体渾厚端凝、避宋諱較厳者、余認為最初刊本、巻末有校対監雕銜名二行者、均在其中。
其後来補刊之葉、亦分数類。有書法勁瘦時露鋒稜者、猶是宋代所刊。
而用筆円活、饒有姿態者、恐已漸入元世。
又有僅存字形全無筆意者、則必用原版覆刻、故有同一刻工姓名、而刀法迥異者、中有陳寿趙明二人所刊葉、可為証也。
項羽本紀陳杞世家蘇秦列伝中、各羼入索隠一葉、是必原本残闕、故以補配、然前後文字却相銜接、可云巧合。

南宋中と元代に補刻が行われたというのは、後に掲げられる刻工名の分類と合わせて正しいと思われる。ただし、陳寿と趙明は原刻補刻の双方に同姓同名の刻工がいるものであり、索隠の羼入というのは、元代の補刻が索隠に拠って行われたものであろう。ついで、版式の記載がある。

半葉九行、行十六字、間有増減一二字者、然絶少、小注雙行、行二十或二十一字。左右雙闌。原刊者　版心多白口、単魚尾。補刊者多細黒口、雙魚尾。書名題　史帝紀幾、史紀幾、本紀幾、史表幾、某書幾　亦有不題書字者、史世家幾、史記列伝幾、史伝幾、列伝幾。其下記刻工姓名。上不記字数者、為原刊之葉、後来補刊者、則多記字数。

つぎの刻工姓名は、原刻、補刻、単字と三分類されている。この原刻刻工は、南宋前期の江浙方面の刊本にはあまりみかけない者が多い。また、補刻は宋元の二期には分たれていない。宋諱は、原刻葉は玄弦絃眩炫縣懸敬警驚竟境弘泓殷慇匡恒禎貞徵癥譲署竪豎樹戌頊姁桓垣洹完浣貙搆媾購覯彀鷇慎等の字を欠筆し、補刻葉は玄眩胘弘殷敬匡筐恒徵樹戌頊桓搆媾覯を欠くだけとしている。最後に蔵印が掲げられ、南京礼部、太倉の王世懋、常熟の毛氏汲古閣等に蔵されていたことをものがたる。なお、この本の一部、次の劉氏旧蔵本の元刊本、明清抄本による補配巻など四七巻が、後述するように、その模刻本に用いられている。

おなじく北京図書館の劉氏旧蔵本は、かつてその嘉業堂で影刻され（民国八年・一九一九）[2]、また嘉業堂善本書影にも掲載

された（民国一八年）。これらから概略は知ることができるが、実見されたはずの賀次君氏の史記書録（商務印書館・一九五八年）に、南宋紹興中淮南路無為州官刊本として八ページにも及ぶ長文の解題があるから、まずこれによることとする。一部にしてもまだ長いが、叙述の都合上、煩を厭わず引用する。句読点・括弧の類をやや改め、傍線を省いた。

首史記目録、次裴駰集解序、序末無結銜、序後又行題「五帝本紀巻第一」七字、又行題「史記一」三字、下注云「凡徐氏義称徐姓云云」、又行即正文。巻末題「五帝本紀第一」以下巻式皆同。毎半頁九行、行十六字、注雙行、行二十一・二十二字不等。細黒口。左右雙辺。版心上記本頁大小字数、亦有不記者。魚尾下題「史記一」三字、下記刻工戴祐・楊守達・王華・華再興・李友文・張名・陳文等姓名。宋洪邁容斎続筆云「紹興中命両淮・江東転運司刻三史版」、今此本李斯列伝・樊酈滕灌列伝・匈奴列伝後並有「左迪功郎充無為軍学教授潘旦校対、右承直郎充淮南路転運司幹辦公事石蒙正開雕」結銜二行、与洪邁所言相符、則此本即南宋高宗紹興中所刻「三史版」者。宋経靖康・建炎之乱、東都旧版散失、南渡初期所刻経・史、皆就北宋伝本覆刊、即将北宋旧本蒙於板上重雕、並不加校改、故紹興間所刻経・史、其文字往往同於北宋本、避諱亦同、所言「無為軍学教授潘旦校対」、非以数本校讐之謂。此本宋諱胤・頊・讓・恒・貞・竟・完・敦・敬字皆欠筆、独殷字不欠、讓字敬字亦有不欠者、蓋避之未尽耳、是為拠北宋旧本覆刻之証。而慎字惇字有数処亦欠筆、或光宗紹熙以後修補者所為耶？

此本伝世不多、今見者為孫敬亭・蔣祖詒・呉退楼・劉承幹所旧蔵、有「両罍軒」「烏程蔣祖詒蔵書」「呉興劉氏嘉業堂蔵書」等朱印。巻首有同治己巳（一八六九）呉雲題跋云、「蜀大字本史記、本紀十二巻・十冊、年表十巻・七冊、八書八巻・四冊、世家三十巻・十二冊、列伝七十巻・三十冊、通計一百三十巻・六十六冊。惜鈔配及別本羼入過半。」此一百三十巻中、孝景・孝武本紀二巻欠、以蜀大字本補。六国年表至建元以来侯者年表六巻欠、清鈔補。律書・封禅書・河渠書三巻欠、明鈔補。斉太公世家「西伯得以反国」至「荘公請献遂邑」以上残、清鈔補。燕召公世家首頁残、清鈔補。陳杞世家至晋世家四巻欠、明鈔補。陳丞相世家至三王世家五巻欠、清鈔補。伯夷列伝至仲尼弟子列伝七巻、穰侯列伝至春申君列伝七巻欠、皆明鈔補。衛将軍驃騎列伝至南越尉佗列伝三巻、淮南衡山列伝至儒林列伝四巻欠、以蜀大字本補。酷吏列伝至太史公自序九巻欠、明鈔補。一百三十巻中、残欠計五十一巻。又武帝本紀後有索隠述賛、而此本単集解無索隠、何来索隠述賛？顕係五帝本紀巻末亦残欠、後人取另一九行大字有索隠者以補之。

版心の細黒口というのは、宝礼堂宋本書録にも明記されていたとおり、おそらく補刻葉であり、模刻本によるとそれも元代のものである。官銜は巻八七・九五・一一〇の三巻の末にあって、巻二〇・二六・一二七にはないことであるが、こ

れは後者が別本、抄本で補配された巻であるからで、模刻本の王舟瑤の重刻蜀大字本史記序に巻八七・九五・一二七にあるという方が誤りであろう。光宗の惇・敦字を欠筆するというのは意外であって、中国版刻図録、宝礼堂宋本書録、さらには模刻本の巻末の劉承幹の跋も孝宗の慎字までを挙げるだけであり、模刻本は清諱の淳字の末画を意識的に欠くなど不確かであるが、惇・敦はみあたらない。

呉雲の跋は嘉業堂善本書影に、史記目録と史記集解序の首葉とともに影刻されている。それには、さらに続けて「旧為孫敬亭蔵、今帰両罍軒。同治己巳新正月四日読秦本紀畢漫記」とある。北京図書館善本書目（一九五九年刊）では淮南転運司刊本の残存は六七巻になる計算で、わずかに過半をこえる。それはともかくとして、この残欠計五一巻というのも正しくない。蜀大字本すなわち善本書目の另一宋刻本が、賀氏によれば巻一一・一二・一一一～一一三・一一八～一二一の九巻と、善本書目の一八巻の半数であり、補抄巻も三巻少いからである。この補抄巻にいたっては、明抄が巻二五・二八・二九・三六～三九・六一～六七・七二～七八・一二二～一三〇の三〇巻、清抄が巻一五～二〇・三二と三四の一部・五六～六〇の一一巻余ということで、明抄本が巻五六～六〇だけの善本書目とは、大半が明清が逆となって大きく相違する。補抄の時期は原本をみないで云々できないが、蜀大字本または另一宋刻本の方は、模刻本では善本書目より巻九九・一〇四の二巻少い一六巻が一見して識別できる。善本書目の巻二三の元大徳本については、まったく触れるところがない。

このあと、賀氏は校勘の結果を詳述している。この本は北宋本の翻版であるから、なお数種ある南宋の諸刻本や後来の各本と較べて精審であるとして、その優れた例を四〇ほど挙げ、是非とは関係のないという異同の箇所を本紀だけで二〇例ほど指摘したあと、宋代の校訂も不精であるという例も、やはり本紀だけで五〇近く提示したものである。

水沢利忠氏も「景刊本に依って」これを校勘し、おそらく尚書等の諸書によって校訂された箇所を提示し、また誤字脱字の少くないことも指摘されて、とくに淮南路本の特徴を云々することは難しく、やはり単集解本グループの一つと考え

ることが適切であろう、と結論していられる。[3]

これらの解題を参照して嘉業堂の模刻本をみると、[4]淮南路転運司刊本の概要がほぼ理解できる。[5]この模刻本は、一見して全巻を二版に大別できる。大半は官銜をもつ淮南路本であり、一六巻だけが、おなじ九行ながら字数が二字ほど少い行一六字内外、版心上象尾に字数があり、刻工名がほとんど単字で、本文の字様も明らかに異る別本である。北京図書館善本書目の配另一宋刻本一八巻より二巻が少いが、これに巻九九・一〇一を加えるとその巻次と完全に一致する。すなわち、賀氏のいう蜀大字本である。[6]

残りの一一四巻が淮南路転運司刊本であるが、劉本にはさらに四五巻の欠巻があって、元大徳刊本、明清抄本によって補われているところ、そして另一宋刻本のうちの二巻は、実は潘氏宝礼堂本を借りて模刻したという（劉承幹跋）。したがって、この模刻本からは北京図書館現蔵の両本の姿が窺われることになるが、両者は刊、修ともまったく同版とみられる。模刻であるから字様などからの識別は危険で、あらかじめ刻工によって見当をつけたうえで版心をみると、白口、上象尾に字数なし、単魚尾の原刻、白口で字数のあるもの多く、単魚尾の南宋中期の補刻、線黒口ときに白口で、字数あり、多くは双魚尾で字様の劣る元代の補刻の少くとも三版のあることが推定できる。これは、後に三史を一括して刻工名を検討したときに証明されよう。慎字の欠筆は二〇例をこえる。官銜は巻二〇、八七、九五、一一〇、一二七にあり、巻二〇は建元以来侯者年表第八であって、建元已来王子侯者年表第九ではなく、巻二六は另一宋刻本であるからこれはない。

なお、旧京書影に巻二四（楽書第二）の首半葉（斜めに右下半欠）が掲げられて、（一八四）原刻葉と思しく、宋刻残本で、旧内閣書、見蔵北平図書館と解題されるものがあるが、いま所在を聞かない。

また、王文進の文禄堂訪書記巻二に著録の宋百衲本史記の一に、宋紹興刻大字本があり、巻三一～三六・三九・四八～

五〇・五二～五五・五七～六〇・七二～八三・九三～九七・一二七～一三〇の計三九巻を存するという。行格は同じく、王全以下二四名の刻工も、南宋中期修の石昌と模刻本では未明の張英の二人の例外を除いて合い、元の補刻についての記事もほぼ同じく、巻九五末に官銜があり、欠画は桓字まで挙げている。商丘の宋犖・至（緯蕭草堂）父子の蔵印がある。

さて、史記は右承直郎充淮南路転運司幹辦公事の石蒙正の監雕するところであったが、おなじく左迪功郎充無為軍軍学教授の潘旦が校対しているから、廬州の無為の地名からみて、これは淮南西路転運司の刊になると考えられる。淮南路はもと一路であったが、容斎続筆に両淮とあったように、北宋の熙寧五年（一〇七二）に東西両路に分たれた（宋史巻八八地理志四一）。転運使は都転運使と称して二路を司るものもあったが、南宋以後は、これを兼ることなく、一路の主に財賦の入を掌ったという（宋史巻一六七職官志一二〇）。

二　漢　書

漢書は、いずれも残・零本もしくは断簡であるが、台湾の中央図書館に一本、同館典蔵の北平図書館本に二本、わが静嘉堂文庫と天理図書館に各一本、京都大学人文科学研究所に断簡一葉が蔵されている。このなかには取合本もあり、みな数次の補修を経てていて、補刻葉の多少は各冊・巻ごとにかなり差があるが、いずれも刊修は同時に行われたものとみられ、南宋前期の刊、同中期・元中期に二度の逓修と推定される。

零本（存巻一下・二・六～一二（八尾欠）・二一（首尾欠）・二四・二七中・二八上・四八（前半欠）・四九（尾欠）　計一七巻）八冊　北平（本紀一下・二・六～一二　志一・四・七中之上下・八上　列伝一八・一九）　第一冊　第二・三冊　第四冊以後　の取合本

第一冊（巻一・二）後補濃紺色表紙（三五・七×二五・二センチ）、印刷題簽「前漢書（下半に『紀一下之五』と墨書）」を貼付、粘

葉装、裏打。第二冊以後後補黒色絹表紙（三五・二×二四・九センチ）、襯装。欠葉は巻八尾が四～五葉、巻二一上首が二四葉半、同下尾が二葉、巻四八葉前半が二九葉、巻四九尾が第三二葉裏からである。第二冊首（巻六）に「晋府／書画／之印」、第二冊以後の毎冊首尾に「京師図／書館収蔵」の印記がある。北平図書館善本書目（一九三三年）に著録され、旧京書影の(187)(188)の二葉はこの本であろう。

零本（存巻一六～二〇・二四・二五・九四・九五　計九巻）（表四～八　志四上～五　下・列伝六四・六五）　四冊　北平

後補淡縹色覆表紙（三一×二二センチ）。巻九四上の尾に「金門羽客黄彦直圭中志」の墨識語、毎冊首尾に「京師図書／館収蔵之印」の印記がある。北平図書館善本書目に著録、旧京書影(189)(190)。

零本（存巻六五）（列伝三五）（欠首三葉・第九葉）　一冊　中央

後補金切箔散らし淡香色表紙（三七・三×二三・七センチ）、粘葉装。扉左肩に「宋監本漢書東方朔伝一巻」と題し、右半に「翼盦贍智宏材瑋博達依隠玩世滑稽／不窮求諸古人迹与東方生為近辛酉孟春値／君四十初度爰此伝以侑寿觴无咎『无咎蔵書』（印）」との識語がある。巻尾に「近圃／収蔵」印。国立中央図書館宋本図録図三六（中華叢書委員会、一九五七年）。

零本（存巻九四～九七上・九九上中）（列伝六四上下・六五・六六　上下・六七上・六九上中）　四冊　静嘉堂

後補香色表紙（三〇・七×二一・五センチ）。「尚宝少／卿袁氏／忠徹印」「尚宝少／卿袁記」、「帰安陸／樹声叔／桐父印」（陰）印。紙背は明洪武年間前半の戸籍簿などで、一部に官印らしいものもみえる。(7) 巻九四は五一葉中四一葉までが原刻、巻六九中は四八葉中五葉だけが原刻と、その残存の差がはげしいが、修補の時期は異らない。

零巻（存巻九九下）（列伝六九下）（首欠）　一冊　天理

後補紺色包表紙（三五・五×二三・八センチ）。襯装。表紙遊び紙に「上野／蔵書」印（焦茶色）。全四八葉のうち首九葉欠。原刻葉は三、南宋中期の補刻葉一で、他は元代の補刻葉とみられる。

断簡（存巻六〇（列伝三〇）第一九葉）　一葉　京都大学人文科学研究所

見開き三二・四×四七センチ。下方やや破損、裏打補修。原刻葉で刻工は孫昇。

右の各本を通じて、いずれも南宋前期に刊刻され、同中期、元中期に二度の補刻を経て、元末から明初に印行されたことが推定されるが、その考察は後に避諱と刻工名をもとに行うとして、この刊修の関係を前提において敍述を進める。

漢書目録、巻一など巻首の部分はどれにも存しないが、北平本に巻一下があり、その巻首には「高帝紀第一下（隔五格）漢書一／（低二格）正義大夫行秘書少監琅邪県開国子顔師古注」と題する。これは元の補刻葉であるが、初葉が原刻葉の巻六武帝紀などもほぼ同じい。原刻葉は左右双辺（ほぼ二二・四×一七・四センチ前後）、毎半葉有界九行、毎行一六字、注文小字双行二〇字。宋修はこれを踏んで覆刻のようにみえるが、元修は字詰がとくに小字の注文などに増減のあるものがあり、余白を生じて墨釘にした箇所もめだつ。版心　線黒口、上象尾に大小字数を記さず、魚尾もなく、「前漢紀（志・年表・伝）幾（葉数）（刻工名）」と題する。この形式は史記・後漢書と異り、いわゆる眉山七史の原刻葉に似る。南宋中期の補刻葉は原刻に近いが、白口のものもあり、字数の入っているものもある。元修葉にも白口無魚尾のものがあるが、多くは線黒口で上象尾に字数を刻し、単または双魚尾で一見して識別できる。静嘉堂本の紙背の小黄冊から明の洪武一五年（一三八二）ごろまでの年代がみえるから、印行は一五世紀以降となり、双魚尾の葉を明修とみられないこともないが、他の元修葉との差が

ほとんどなく、明代の修補は認めにくい。

字様も、原刻の堂々たる楷書から、南宋中期には整っているものの固さを帯びてきて、元代にはいささか粗雑になっている。

宋諱欠筆は、玄弦眩絃鉉縣懸敬驚警弘殷匡竟境恒貞徴樹讓頊顓桓貎完莞源構購慤慎の諸字に行われているが、別に欽宗の桓を「淵聖御名」とするところがある。桓の末画を欠くものもわずかに傾いたり、浮きぎみであったりして、おそらく「淵聖御名」とあったものを埋木して改めた形跡が明らかである。

静嘉堂本は厳密には五巻に満たず、比較的葉数が多いから上中下を各一巻と数えても八巻にすぎないが、この本文を校勘すると、原刻葉は中華書局の標点本の漢書（一九六二年刊）の各巻末に付けられた校勘記にとりあげられた箇所のほかには、ほとんど異同がみられない。つまり、そこには百衲本二十四史の漢書に影印された常熟嬰氏鉄琴銅劍楼旧蔵・北京図書館現蔵のいわゆる北宋景祐刊本、汲古閣本、武英殿本、清同治金陵書局本、それに王先謙の漢書補注が用いられているが、これらと較べてこの転運司本独自の特色が乏しいことになる。しかし、いわゆる景祐刊本と相違するところが約四〇あって、全体の二割にもなり、漢書補注によるとその三分の一強はいわゆる景祐刊本が正しく、三分の一弱は転運司本が勝り、結局、水沢氏による史記と同様、転運司本はとくに優れもせず劣りもせず、漢書の一資料となるというところであろう。ただし、元代の補刻葉はやはり悪く、誤字、墨釘のままの脱字、異体字などが少くない。

三　後漢書

後漢書は、百衲本二十四史の後漢書に影印された涵芬楼旧蔵・北京図書館現蔵本をはじめ、六本の存在が知られ、いず

れも漢書と同じく南宋中期と元の補修を受けている。そのなかで北京図書館本は、百衲本でみるかぎりでは、補刻葉がきわめて少い美本で、他の各本の元代の補修が二度にわたったことと示唆する。上海図書館本は一部に補写葉があるものの完本らしいが、明補版とあって北平図書館本、静嘉堂本、天理本のさらに後修本かもしれない。

後漢書は范曄の本紀一〇巻、列伝八〇巻と司馬彪の志三〇巻から成るが、後に武英殿版が他の諸史のように、紀・志・伝と配して巻次を通算したのに、この本は、まず紀・伝を連ねて通巻とし、范書に欠ける志を補う旨の乾興元年の中書門下から国子監への牒を挾んで、劉昭の後漢書注補志序と志を続け、そこには通巻数を入れない。すなわち、首題は紀・伝では「帝紀第一上（空二格）范曄（空一格）後漢書一／（低七格）唐章懐太子賢注」と小題を上に大題を下にするのに、志には「後漢書志第一（空二格）律暦上／（低八格）劉　昭　注補」のように大小題を合わせて志の巻次だけを示すのである。ただし、目録は紀・志・伝の順に並べて、巻次を通算していない。

残本（存巻六・七・九・一〇・一六～一八・二一～二九・三三～三六・三八～五九・六一～六四・六八～七〇・七三～七八・八二下～八五・八八）（紀六・七・九・一〇　列伝六～八・一一～一九　二三～二六・二八～四九・五一～五四・五八～六〇・六三～六八・七二下～八五・八八）計六〇巻一七冊　静嘉堂、

後補香色表紙（三〇・九×二一・五センチ）。一部の巻の首大題を切取ってある。印記および紙背は漢書と同じく、「尚宝少／卿袁氏／忠徹印」「尚宝少／卿袁記」、「帰安陸／樹声叔／桐父印」（陰）、および明洪武年間の戸籍簿であるが、印記の大半は大題とともに切取られている。巻六二・六三、および五八・七三の一部は料紙を異にし、やや小型で薄手、紙背に戸籍の記載がなく、襯装。

零本（巻四～八・五八・五九（後半欠）・七四下～七六・八一・八二・八六・八七　志一・二・六～九・一三～一五）（紀四～八　列伝四八・四九・六四下～六六・七一～七二下・七六・七七　志一・二・六～九・一三～一五）計二三巻　北平

改装後補紺色表紙（三六・九×二三・六センチ）、粘葉装。巻五九は第二四葉まで存（欠一六葉）。各冊首尾に「京師図書／館収蔵之印」がある。旧京書影（200）（201）。静嘉堂本と共通の巻が八巻あり、原刻葉の残存や補刻刻工の名も同じであるが、こ

の本の方が版面四周の補修が多く、原刻葉で静嘉堂本には存する刻工名をも失っているところがある。静嘉堂本よりやや部分補修を加えた後印本と思われる。

零本（存巻三三）（列伝二三）　一冊　天理

改装後補紺色表紙（三五・五×二五センチ）、綴葉装。表紙遊び紙に「上野／蔵書」焦茶色印。静嘉堂本の同巻とまったく同版。

三本とも首初を欠くが、百衲本後漢書には後漢書目録がある。左右双辺（二二・八×一七・五センチ）、毎半葉九行、毎行一六字、注文小字双行二〇字。版心白口、単魚尾、「後漢帝紀（列伝・書志）幾（葉数）（刻工名）」。この形式は、史記と似て漢書に異る。補修は漢書とまったく同じく、南宋中期と元中期の再度とに行われたものと思われる。これは後に刻工名を検討して考える。欠画は漢書よりいっそう厳格で、「淵聖御名」のほかに、南宋初代高宗の構字を避諱して「今上御名」とする例があるが、これらについても後に改めてとりあげる。

一二〇巻（巻一二～一六補写）　四〇冊　北京

上海涵芬楼旧蔵で、当時百衲本二十四史の後漢書に影印された。中国版刻図録（図版一〇八）によれば、「匡高二一・四厘米、広一七、一厘米。九行、十六字。注文雙行、行二十八字。白口、左右雙辺。」である。張元済氏の涵芬楼燼余書録（上海商務印書館・一九五一年）には、刻工名が初刻と上象尾に字数のある補刻との二つに分けてほぼ採録されており、欠画については同じ張氏の百衲本後漢書の跋と校史随筆（長沙商務印書館・一九三八年）の後漢書の「避宋諱特厳」の条に実に一

〇〇余例が列挙されている。実は補刻は南宋中期と元の二度に行われたとみられるが、張氏の刻工の分類は原・補刻で二期なために、字数の有無で南宋中期刻工の蔡仁・凌宗・龐汝升・王寿・孫春・王渙・宋琚・徐珙・朱玩・馬祖・鄧堅らが原刻に、同じ金震・高異・童遇・朱梓・徐仁・陳允升・汪亮・童忠・丁松年・丁之才・沈昌らが補刻に入れられている。刻工をこれを訂して三期に分つのは中国版刻図録にみえ、第一期（原刻）を南宋初葉南京地区良工として、この本を江南東路転運司刊本と断じている。ただし、所掲の書影巻二四首葉は、上象尾に大小字数が入り、刻工名も文玉とみえて、明らかに元修葉である。しかし補刻葉はきわめて少くて、巻二～五・七～九・二〇～二二・二五・二八下・三〇上～三七・三九・四四～四六・五一・五二・五六～五八・六七～七一・七四下・七五・一〇二～一〇四・一一一～一一四・一二〇の四六巻はすべて原刻のままであり、一部に補刻が半分に近い巻もあるものの、全体では三五〇〇余葉のうちの一割強にしかすぎない。この補刻の状況をさらに後修の北平本、静嘉堂本と較べるとと、（一巻中の補刻葉数　京は北京本　平は北平本　静は静嘉堂本）

巻六　全29葉中　京4　平・静12　巻七　全25葉中　京0　平・静8　巻八　全24葉中　京0　平10　巻三八　全17葉中　京1　静10　巻三九　全27葉中　京0　静24　巻八六　全38葉中　京4　平29　巻八七　全43葉中　京7　平16

いう具合にかなり少い。北京本の修補は元の中期と思われるが、他本もそれからさほど隔たらぬやはり元中期にさらに修補を受けたようで、この後に原刻板木の磨滅損傷が著しく進んだことになる。

これらについては北京本（百衲本）と静嘉堂本、北平本を一葉ごとに対比し、刻工名を検討して判断されるので、後に一項を立てて考える。宋諱の欠筆についても同様である。

百衲本巻末の張跋には、本文を東漢書刊誤と比較して、これに優る例を列挙している。その撰者の劉攽は北宋にあって善本に拠り、鑽研も深いものがあるが、この本を北宋刊本を藍本とするものであるとして、南宋の覆刻で元修を経ているものの、後刻の諸本よりはるかに勝れていると強調される。

一九六五年中華書局刊の標点本の後漢書もこのいわゆる紹興本を底本として、これに汲古閣本と武英殿本を対校し、さらに東漢書刊誤、王先謙の後漢書集解と黄山の校補の所説の採るべきを採って校訂しているが、この本は他本に較べて非常に優れているという。

巻一二～一六（列伝二～六）の抄補部分を、百衲本は当時の北京図書館蔵の同版本をもって補ったという。原欠五巻半とあるが、巻一一の後半第一〇葉または一六葉から補配されているらしい。ここには原刻葉も残っているが、多くは双魚尾の明初修葉と思しく、静嘉堂本などよりさらに後修本とみられる。北平図書館善本書目には宋刻本が六本著録されているが、転運司本、紹興本のように明記されておらず、この中にはいわゆる福唐郡庠刊の一〇行本も含まれていよう。ただ、第一の存二三巻は現台北の北平本であり、また、伝二～六を存するのは第四の存六二巻（伝一～一一・一四～二七・三〇下～三八・四八・四九・五五～八〇）の宋刻明印本だけである。張跋によると静嘉堂本も用いたようであるが、該当するのは巻一六が存するにすぎない。旧京書影には二本の書影四葉（伝一九―一・七一―一、志一―一・伝七七―四三）が収められ、後者は現台北の北平本であるらしく、前三葉は補刻葉である。現在の北京図書館善本書目には、百衲本の一本しか著録されていない。

上海図書館蔵本は一二〇巻、その善本書目によれば宋紹興刻明補版とあり、清の季振宜が欠葉を補抄しているという。

四　刻工について

さて刻工であるが、まず、原刻、南宋中期・元の補刻と三分することにし、一方、三史に共通する者がいるので、各期ごとに合わせて掲げる。

原刻刻工はつぎのとうりである。

a　史記　　b　漢書　　c　後漢書

2 丁璋b
王石cb
王華a
仲鑒良a
吳佐ca
李杲b
李棠c
8 卓受cb
林康c
洪沢cb
徐茂b
張昇b
許源b
陳敏cb
程用c
葉才a
劉清c

3 上官傳b
王仲b
王景a
朱安明c
吳宗b
李芳ca
李椿c
卓宥b
林選a
10 孫昇b
徐逵b
張況b
郭惇c
陳詢b
華再興a
葉石a
劉章a

于洋c
王先文a
王琮c
朱明ca
吳迪a
李俊b
李詢b
周永a
金茂b
孫彦ca
徐諒b
張真a
陳用c
陳說b
華定c
葉克己b
劉寔c

4 仇永a
王全a
王栄c
朱静b
吳渙a
李度b
李碩c
周用b
金莘b
孫格b
徐顔b
張翼a
陳至c
陳寿ab
閔孝中a
葉青a
劉源b

毛仙c
王成b
王寿a
7 何通cab
吳興b
李彦ca
李璋c
周茂c
9 俞尚a
孫琦b
荆宣c
戚聰旺a
陳伸cab
陳德a
13 楊安a
董昕b
劉璋a

毛彦b
王政b
王沢a
余中c
宋寔a
李恂ca
李憲b
周清c
施光a
孫楹b
袁俏ca
曹硪a
陳辰c
陳震ca
楊守道a
董明b
蔡通b

毛諒b
王亮b
王徽b
余坦b
李允c
李倍c
李懋b
屈旻ca
施沢b
徐侃b
袁俊c
梁文b
陳庠b
陳興c
楊明a
董暉b
蔣勍b

王中cb
王珍b
王挙a
余竑b
李文b
李純b
汪清a
林仁c
洪先b
徐坦b
11 婁謹b
章宇b
陳彦ca
陳鎮cb
楊垓ca
14 翟栄a
鄧堅c

王允成c
王茂b
5 丘甸ca
李用c
李清c
沈亨b
林志遠c
洪茂b
徐定b
崔彦b
章旼ca
陳真b
陳権a
楊程cb
趙明a
16 盧鑑a

王永cb
王恩b
包政b
李秀ca
李章cb
沈昇b
林芳cb
洪珍b
徐杲b
張圭b
章英c
陳振c
12 彭祥a
楊道a
15 劉仲cb
17 謝興a

王永従c
王祐a
6 仲良a
李昇cb
李景b
沈恭b
林俊cb
洪新b
徐竑b
張宗ca
章駒c
陳従cb
惠道b
楊謹a
劉康c
韓仔a

18 戴祐a　魏正a　魏俊a　19 羅成a　20 厳定b　21 顧珺a　顧真a

以上を数えると計一九五人、a史記が六八人、b漢書が九二人、c後漢書が六八人で、二書以上を刻しているものがいるから延べて二二八人になる。

これらのうち、史記と漢書の双方を刻するのはわずかに陳寿一人、史記と後漢書とが一三人、両漢書ともが一四人、三史の雕造にすべて携ったのが何通と陳伸の二人である。すなわち、各書の刻工の二割前後が他のいずれか一書をも手がけており、とくに後漢書の刻工は史記、漢書の両方の刊刻にも係わり、それでいて史記と漢書の関係はきわめて薄いということである。このうち、史記は淮南西路転運司の刊本であった。残る両漢書は、それぞれ淮南東路と江南東路のいずれかの転運司の刊行するところのはずである。(8)

これらの刻工が他の南宋前期の刊本、とくに刊記をもつ刊本にどの程度あらわれるかを調べて、刊刻の時期と地域を推定しようと試みたのがつぎの表である。ほぼ中央の史記・漢書・後漢書の段の数字が、両書に共通する刻工の数である。表の末尾に二段に掲げたのは、刊記がないがほぼこの時期の刊本と思われ、その刻工を参考にすべきもので、表の体例は前と同じである。

巻数は宋版の存巻数で、補写・補配などの巻数は含めない。
※印は中国版刻図録によるもの。その解題に刻工は各数人をあげるだけで、この数字はその一部にすぎまい。
欠筆はもっとも後代の帝諱を示した。　所蔵の図書館、文庫の称を略した。
備考の刊記・序跋・官銜は必要部分をできるだけ原文のとおり掲げたが、抜萃・省略も少くない。

書名	巻数	刊年	刊地	史記	漢書	後漢書	筆欠	所蔵	備考
思溪円覚蔵経		紹興二年	湖州		7	1		大谷大	大宋国両浙道湖州帰安県松亭郷思溪居住王永從…開鏤　紹興二年四月
（新）唐書	存188巻	（原刻）紹興七年 （補刻）	湖州	1	1	6	1	禎	（百衲本）
北山小集	40巻		湖州	1	4	2		静嘉堂	
文粋	100巻	紹興九年	臨安府		3*	1		静嘉堂	影鈔本　原本の紙背　乾道六年湖州官司簿帳
漢官儀	3巻	紹興九年	臨安府			1		北京	（四部叢刊）
毛詩正義	存33巻	紹興九年	紹興府		4	1		構	臨安府今重行開雕…紹興九年正月　日
事類賦		紹興一六年	紹興府		5*			北京	（中国版刻図録）
（旧）唐書	存69巻	紹興	紹興府	2	8	3		構	紹興九年三月臨安府雕印
外台秘要方	40巻	紹興	紹興府	1	10	5		北京	（続古逸叢書）
周易注疏	13巻	乾道淳熙	紹興府	1	4	3		完	紹興九年九月十五日紹興府雕造
尚書正義	20巻	乾道淳熙	紹興府	1	13	2		構	（東方文化叢書）
礼記正義	70巻	紹熙三年	紹興府	2	4	3		静嘉堂	紹興十六年辺惇徳刻書序 右從政郎充浙東提挙茶塩司幹辦公事李端民校勘
文選	60巻	（原刻）紹興 （補刻）紹興二八年	明州	1	4	1		構	（中国版刻図録）
三国志	存30巻		衢州？	2	6	1		書陵部	右文林郎充両浙東路提挙茶塩司幹弁公事趙子孟校勘 左從政郎紹興府録事参軍張嘉賓校勘
芸文類聚	存90巻	厳州*	厳州	1	3	2		北京	（百衲本）
通鑑紀事本末	存28巻	淳熙二年	厳州	2	1	3		構	中国版刻図録は杭州刊とする　（百衲本巻一～三　刻工数はこの三巻分）
								上海	（中華書局影印本）
								静嘉堂	是書刊淳熙乙未、修于端平甲午、重修淳祐丙午… 承直郎差充厳州州学教授章士元董局

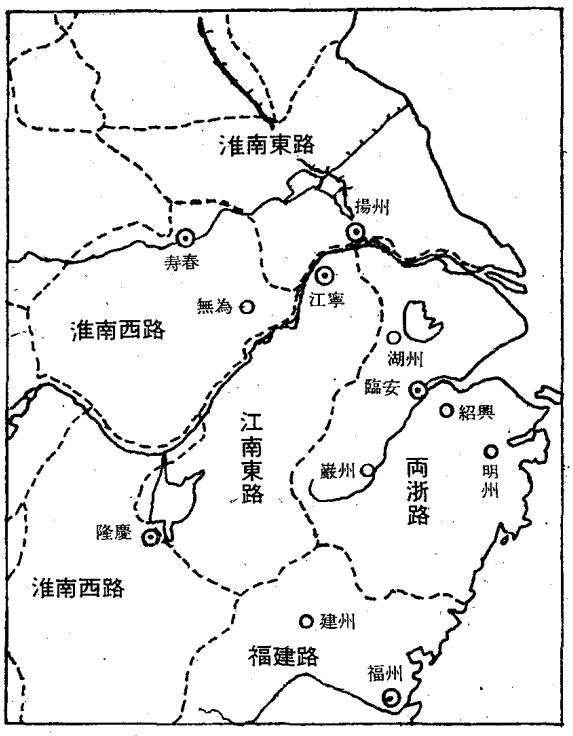
史記（索隱）	存99巻	淳熙三年 同八年修	桐川郡	6 1	慎　静嘉堂　淳熙丙申郡守張介仲刊太史公書于郡斎（補写）
花閑集	10巻	紹興一八年	建康郡	4	構　南京　紹興十八年二月二日済陽晁謙之題
文選	60巻		贛州	2 1	慎　静嘉堂　左従政郎贛州州学教授張之綱覆校

（中国版刻図録）

白氏六帖事類集	30巻	11 1	構　静嘉堂		
通典	存169巻（原刻） （補刻）	2 13 4 6	慎　天理	劉賓客文集30巻外集10巻	1 2 1　構　故宮博
				世説新語	3巻　2 2 2　慎　尊経閣
				世説新語	3巻　2 1　書陵部
論衡	存25巻	8 1	構　書陵部	王文公文集	存70巻　5 1 2　構　書陵部
				唐百家詩選	存10巻　4 1 1　構　静嘉堂

一見して、紹興から淳熙乾道年間にかけての南宋初期もしくは前期の、臨安・紹興府や湖州・明州など両浙路の中心部の諸刊本と、漢書が密接な関係にあることは歴然としている。後漢書がこれに次ぎ、淮南西路の史記はさすがに共通の刻工が少い。しかし、この両浙の中心に近接するのは江南東路であるが、転運使の駐在する江寧府はその北端にあって、杭州からの距離は淮南東路府の揚州とさほど変らないから、これだけでは両漢書がそれぞれ江南東路の転運司の刊刻するところとはとても判じがたいのである。

中国版刻図録が後漢書を江南東路転運司刊とするのは、紹興十八年建康郡斎刊の花閑集の刻工と多く合致するからである。すなわち、花閑集（図版一〇五・一〇六）の解題（二五～二六頁）には、周清・章旼・毛仙・于洋が後漢書を、章旼・黄祥が当塗本郭祥正青山集をも刻していて、この三書はみな南宋初年南京地区の官版で、故に刻工が多く同じであるという。北京図書館蔵の花閑集は一九五五年に文学古籍刊行社で影印されたが、版心の部分を省いたので、刻工は右のほかに、同



図録の杜工部集（図版一〇九）の解題にみえる鄭珣、黄淵・楊詵の名を明らかにするにすぎない。花閒集は一〇巻四冊すべて一二五葉であるから、なおいく人かの刻工がいて、後漢書と合う名があるかもしれないが、それも多くは望めないところである。

この杜工部集二〇巻補遺一巻は上海図書館の蔵するところで、続古逸叢書に影印本がある。いま版刻図録の解題と影印本の張元済氏の跋によりながらこれを検すると、これはともに一〇行の二種の取合本である。第一種本の刻工は明州本文選と八人、北京図書館蔵の紹興三年両浙東路茶塩司刊の資治通鑑と一七人が同じというように、南宋初期浙刊本とみられ、漢書とも洪先・洪茂の二人が合う。第二種本の方が花閒集と刻工の共通するもので、その三名はやはり青山集にもあるというが、ぜんぶで九名の刻工のうちに、後漢書と合うものはおらず史記を刻する王祐の名がある。

右のように、紹興一八年建康郡斎における晁謙之の刊語をもつ花閒集を中心に、青山集、杜工部集の一部、そして後漢書の刻工にたがいに共通するものがあるとして、中国版刻図録はこれらの刊刻の地を南京とする。

後漢書はとりわけ花閒集と関係が深いようではあるが、これをもって南京すなわち江南東路（江寧府）とするなら、右の表のとうりで漢書は両淮江東というより両浙路とみなすべきことになる。また、後漢書と史記、漢書とは共通の刻工が一三人、一四人といるのだから、いずれも江南東路ともなりかねず、刊記がない以上、両漢書については刊刻の地を比定できない。だいたいこれらの刻工が各々の転運司の府へ一定期間出向いて仕事をしたかもしれないし、転運司が臨安、紹興

付近ないしは遠く建安の彫版地域に発注したのかもしれないが、結局この行動・運搬の半径を限定するに止まって、刊刻の地を特定しえない。これは年代にしてもそうで、刻工の活動期間はおよそ三〇年、長いもので五〇年にも及ぼうから、刊年の推定にも数十年の幅を生ずることになるが、それでもこの範囲の限定で意味は大きいものがある。

ところで、大谷大学図書館や岐阜県長滝寺の蔵する思溪円覚蔵経の拱～臣字函の新訳の大方広仏華厳経八〇巻は、紹興二年ごろに彫蔵された六行一七字の原版でなくて、それよりやや大字の五行一五字の別版に代えられている。堂々として端正なやはり南宋初の字様を示し、大谷本は一八巻を欠くが、なお二〇人ほどの刻工名を印している。そのうち四人が史記に、二人が漢書に、五人が後漢書に見える名である。そして、「建州浦城林和」「建州東陽陳興」「建州東陽陳異」「建州東陽麻川陳至刊」とするものがあって、(9)かれらが建安周辺の浦城・東陽の刻工であることをものがたる。そのほかを含めて、林・葉姓のものが各三人、陳姓が六人いてこれで過半を占め、また次に述べるように両浙路方面の刊本の刻工とは異ることなどから、建州の地名を冠しないものもほぼ同郷の人たちかと思われる。そうであるとすれば、少くとも史記と後漢書の刻工の多くも、建州のものではないかという推測も十分に成りたつ。この大方広仏華厳経の刻工は、史記・後漢書と同様、漢書などの両浙路関係のものとはほとんど合わず、先に掲げた表の諸書の刻工と較べると、思溪版、周易正義、白氏六帖事類集、唐百家詩選にそれぞれ一人づつの名がみえるにすぎない。

両淮江東の転運司が建州へ発注したか、刻工を呼びよせたかのいずれにしても、先にその範囲を限定するといったときには、それをたがいに隣接する両淮江東の三路に両浙路を加えた程度を想定していたが、ここに福建路をも含めなければならないようである。

しかし、いずれにしても、この三史は国子監が刊行を企て、この雕版を両淮江東の三転運司に分命したものであろう。建炎以来繫年要録巻一六二、紹興二一年五月乙丑の条に、秦桧が国子監に五経と三史を復刻させようと欲し、これに対し

孝宗が、その他の闕書も次第に彫板させ、費用は惜しむまいと答えたという。建炎以来朝野雑記甲集巻四の監本書籍の条も、靖康の難後まもない紹興の初めには、旧監本の書籍を諸道の州学から集めても残欠が多く、六経に礼記がなく三史に漢書がないというありさまであったといって、この秦桧の記事を載せ、監本書籍は紹興末年に刊するところであったとする。容斎続筆に「紹興中、分命両淮江東転運司、刻三史板」とあったのは、この両書の記事に符合する。そして紹興最末に少くとも両漢書が一旦完成し、国子監に収められたものかと思われる。

補刻はほとんど元代に行われたものであるが、漢書・後漢書についてみると、僅かながらそれより早い宋代のものがあり、他書との刻工の比較で南宋中期とみられる。史記は、模刻本や原補刻は分けたものの補刻は宋元とも一括している宝礼堂宋本書録では、これを区別しにくいが、両漢書と同名の刻工や、南宋中期刻工表と対照して合うものは、この期のものと認めてよかろう。同様に、百衲本後漢書は影印本ながら字様、版心、欠画などを些細にみ、静嘉堂などの残本と較べたうえで、この補刻刻工を拾いあげた。ここでは三史別々に掲げ、それぞれ同じ刻工名のある南宋中期の刊記または刊年を示す序跋をもつ刊本と対照する。刻工表の後に対照する南宋中期刊本を表示し、同名の刻工のいる本の記号を刻工名の下に記した。

a　史記

2丁松年$^{b\|n}_{cp}$　4王汝霖$^{l}_{qp}$　5石昌$^{2oq}_{p}$　7呉中^{p}　8金祖$^{nq}_{p}$　10凌宗$^{bnb}_{cp}$　11曹鼎$^{p}_{q}$　陳彬$^{6p}_{\|q}$

陳寿$^{1nq}_{p}$　19龐汝升^{cp}

b　漢書

2丁松年$^{a\|n}_{cp}$　4方中$^{3p}_{l}$　王汝林^{q}　王玩$^{1v}_{l}$　王珍^{v}　王恭$^{nq}_{px}$　王渙$^{cp}_{q}$　王栄

7 何澄 Ⅰ p q　呉祐 n q p　宋祖 p　宋通 Ⅰ p q　李仲 n v p　沈定 n p　沈珍 n v p x　8 周元輔

周常　金震 c n　10 凌宗 a n q c p　孫春 c n p　徐仁 c Ⅰ n v　徐良 2　徐経 n　高異 c

徐珣 6 n　11 崔達　張由　章忠 c p q　陳浩 Ⅰ n v p　12 程恵　13 楊栄 p　楊潤 6 n q x p v

15 劉昭 1 Ⅱ o v Ⅰ p x　蔣栄 6 p　鄭春 c p　厳忠 5　顧達 n p

c 後漢書

2 丁之才 Ⅰ n q p v　丁松年 a Ⅱ n b p　4 毛端 o v p x　王渙 6 p q　王寿 Ⅰ p x q　6 朱玩 1 p Ⅰ　朱梓 6 n v o　7 宋琚 1 Ⅰ

沈定 n p　沈昌 x　8 金震 b n　10 凌宗 a n q b p　(孫)日新 Ⅰ n q p　孫春 b n p　徐仁 b Ⅰ n v　徐珙 6 n x Ⅱ p

馬松 6 n p x　馬祖 Ⅰ n x Ⅱ p　高異 b Ⅰ n x p　11 章忠 b p q　12 童遇 p　13 楊昌　15 蔡仁 6　鄭春 c p

19 龐汝升 a p

a b c 他の二史にも存することを示す　1～9 Ⅰ～Ⅲ n～q v x 左の表を参照

1	歴代故事	宋	楊次山編	嘉定五年跋刊	一二冊	静嘉堂
2	石林奏議 一五巻	宋	葉夢得撰 葉横編	開禧二年跋刊	四冊	静嘉堂
3	欧公本末 四巻	宋	呂祖謙撰	嘉定五年跋刊	二〇冊	静嘉堂
4	新刊校定集注杜詩 零本（存巻六～一一）	唐	杜甫撰 宋郭知達編	宝慶元年広東漕運司刊	三冊	静嘉堂
5	中興館閣録一〇巻(巻一欠) 続録一〇巻(巻九欠)	宋	陳騤等撰補	嘉定三年跋刊〔南宋末元初〕増補修	四冊	中央(図六六)
6	呉郡志 五〇巻	宋	范成大撰 汪泰亨等増補	紹定二年李寿明平江府刊	一六冊	中央(図七七)
7	儀礼経伝通解 三七巻(欠巻二六・二七) 続二九巻			嘉定一四年序刊	七七冊	中央(図一七)
8	心経	宋	真徳秀撰	淳祐二年刊	一冊	中央(図八四)
8	心経・政経	宋	真徳秀撰	淳祐二年刊	一冊	故宮
9	資治通鑑綱目 五九巻	宋	朱熹撰	嘉定一二年真徳秀温陵郡斎刊	六〇冊	中央(図五六)

(図は国立中央図書館宋本書録)

Ⅰ　春秋左伝正義　三六巻　唐孔穎達正義　慶元六年沈中賓刊　三二冊　北京（図七九八〇）
Ⅱ　渭南文集　五〇巻（欠巻三・四・一一・一二）宋陸游撰　嘉定一三年　陸子遹刊　二四冊　北京（図三七）
Ⅲ　晋書　残本（存五四巻）　唐太宗勅撰　嘉泰四年至開禧元年秋浦郡斎刊　北京（図一二三四）
この三本は中国版刻図録による

n　増修互註礼部韻略　五巻（欠巻一）宋毛晃増註　男居正重増　〔南宋中期〕刊〔元〕修　四冊　北平
o　重校添註音弁唐柳先生文集　四五巻外集二巻　残本（存一七巻）　唐柳宗元撰　宋鄭定輯註　〔南宋中期〕刊　二四冊　九冊　中央
p　古史　六〇巻　宋蘇轍撰　蘇遜注　〔南宋中期〕刊〔明初〕修　二四冊　一八冊　故宮（涵芬楼燼余書録）
q　晦菴先生文集　一〇〇巻　目録二巻　残本（存五四巻）　残本（存六五巻）　零本（存巻七一・七四）　宋朱熹撰　〔南宋中期〕刊　元後至元二年修　一〇〇冊　五六冊　六四冊　二冊　北京（同右）　北平　北平　天理

v　礼記正義　七〇巻　唐孔穎達正義　紹熙三年跋刊〔元〕修　三五冊　足利
x　尚書正義　二〇巻　唐孔穎達正義　〔乾道淳熙〕刊後修　八冊　足利

南宋中期刊工表は、右の凡例に掲げた寧宗、理宗代の刊年の明らかな一二書（1～9　Ⅰ～Ⅲ）の刊工を基準として、これらと同名の刊工を少くとも五人以上は擁する諸書の刊工を配して試作された。後者については、ここには三史補刻の刊工とくに関係の深い四本（n～q）しか掲げなかった。

この刊記本はほぼ慶元（一一九五～）から淳祐（～一二五三）にいたる一三世紀前半の刊本であるが、その中ごろとなると三史の補刻刊工と合うものは淳祐二年（一二四二）の心経や表外の宝祐五年（一二五七）刊の通鑑記事本末には後者の徐珙のほかにはおらず、また、早い方では乾道（一一六五～）・淳熙（一一七四）・紹熙（一一九〇～一一九四）年間の刊の越刊八行本注疏の尚書正義・礼記正義の刊工とも一部は共通するところから、三史の第一次修補は紹熙・慶元から紹定ごろのまさ

に南宋中期に行われたものと推定してよかろう。

これらの刻工のなかで三史のいずれをも補修したのは丁之才と凌宗の二人だけであるが、これはこの期の補刻葉がきわめて少いからであって、おそらく三史とも同時に修補されたかと思われる。礼部韻略、古史、晦菴先生文集の刻工とは大半のものが一致するからである。つまり、この期の補刻は、原刻のように三転運使のもとで別々に行われたのではなく、すでに一所に集めて行われたものであろう。容斎続筆と建炎以来朝野雑記の記事によって考えられたように、両淮江東の三転運使に分けて命じて刻したあと、臨安府の国子監に収めて、ここで印行し、あるいは補修されたものと思われる。

この南宋中期にこれらの刻工によって行われた補刻の例は、宋書、南斉書、梁書、陳書、魏書、北斉書、周書のいわゆる眉山七史など少くないが、その多くは同様に次の元代の修補をも伴っているから、後にあらためて触れることにする。

元修葉は字様が劣るから一見して明瞭であるが、百衲本後漢書にわずかながらあり、静嘉堂・北平蔵本はそれよりかなり増えている。前述のとおり、百衲本後漢書にはまったく補修のない巻が四〇巻近くもあるが、その他の巻には元代の補刻葉が数葉づつ、多い巻で一〇数葉あって、全一二〇巻では三五〇〇余葉のうち四〇〇余葉、およそ一〇％余りになる。これにたいし静嘉堂本・北平本の元修葉は、巻四が百衲本の〇から八、巻五が〇から三、巻六が一から九というように、著しく進んでいる。なかには、百衲本の元修葉が後二本でさらに新しい版に改められている例が、少くとも二〇葉はある。

すなわち、元代の補刻が二期わたって行われたことをものがたる。そこで、当時は涵芬楼の所蔵で現北京図書館蔵本を影印した百衲本後漢書にみえる元代の刻工と、これと対照して静嘉堂本、北平本にはじめてあらわれる刻工とを、別に分けて掲げるとつぎのようになる。

元第一期修（百衲本）

2丁　3万二　于　弓○華　才　4仇　今許一　元　太　文玉　方明四　毛文　毛崙　王　王付　王○全　王百九　王伸　王良　王○高
王得　王智　王渙　王僖　王寿　王○栄　王○興　5占　占△讓　史　石宝　6仲　仲召　任吉甫　任后　任聿　任○昌　任△阿伴　任亮　任韋
弩陳秀（務）　兆　全　吉　吉甫　吉兪　**求**　成　朱六　朱曽　朱○曽九　7何宗十七　何○宗十四　何浩　何益　何通　何慶　呉○子華
呉祥　李庚　李○崙　李祥　杞　汪亮　汪△恵老　沈○一　沈定　沈寿　系元　阮明　阮明五　麦　8匂○　開成　周秀　周○鼎　孟三　宗二
林　芦　芦垚　芦開三　金　金二　金友　9兪栄　兪○声　信　**皇**　姚　建　洪来　洪福　胡　胡○昶　胡慶十四　胡騰　茂五　范堅
范華　茅　茅○化竜　茅○文竜　10倪頤　凌　孫元　孫再　孫斌　孫開　徐　徐友山　徐○文　徐○泳　徐良　徐宗　徐栄祖　時　翁　馬文
○高涼　高諒　11婁正　庸忠信　張　張三　張明　張珍　張益　曹新　曹栄　盛　盛九　章　章○文　章文一　章正明　章亜明　章東
章忠　章著　章○演　章浜　陳　陳万二　陳○仁　陳文玉　陳日裕　陳邦卿　陳明　陳孫　陳琇　陸永　12単○巳　費　閏○　黄○亨　13楊○十三
楊昌　楊明　葉禾　葛仏一　葛辛　董　虞良　詹徳満　14熊道瓊　趙春　趙遇春　斉○明　15潘○用　潘成　澄　滕○慶　蔡　蔡秀　蔣七
蔣仏老　蔣蚤　17応三秀　応○華　応徳　繆○珍　19龐万五　20蘇　鐘同寿　21顧忠信　　○大徳重校聖済総録

元第二期修（静嘉堂本・北平本）

3士中　子成　寸　4中　亢　亢六　仁　元亨　匀　太亨　戸　文二　文昌　王　王正　王明　王徳明　5丘　丘挙之　**冤**　占　古賢※
句　平※山　本　正　用　6任　任子敬　全山　吉　**求**　朱　朱※大存　朱元　朱珍　羊　7亨　伯　伯夫　何　呉　呉仲　呉仲明　呉祥
李　李章　沈山　系　言　辰福一　谷仲　8叔　周※鼎　明　易　杭宗文　林　林※茂　林茂叔　林茂実　東　東子　芦　青※之　9政
施沢之　茂実　范　范又評　茅　10孫　孫誠　徐艾山　徐明　時　11張伯□　張佝　張明　張福一　曹中　曹興　章　許※成　陳　陶中
12屠　彭　童　童禾　雇　雇恭　黄　13慶　虞　誠　14寿　寿之　煥　煥之　趙※秀　趙※明　趙彦　15潘　鄭埜　16徳裕　沢之　銭成
17魏　魏伯夫　　※六書統・六書統溯源

このうち、一、二期の双方にみえるのは周鼎だけである。巻六三第七葉は百衲本に周鼎とあるのが静嘉堂本は戸に改められており、逆に巻三九第一七・二三葉は百衲本が明らかに原刻葉であるのに、静嘉堂本で周鼎による補刻葉になってい

る。百衲本はしばしば写真原版に加筆を行ったりして、底本と刻工名が異る場合は珍しくないが、原刻葉を捏造はしまいとして、前者が原本は周鼎ではないのかもしれない。しかし、第一期修に周鼎がいてむしろ当然であり、両期にその名がみえることがおかしくないことを次に述べる。

右の元代の刻工は、いわゆる眉山七史の補刻葉に両期ともみられるのを筆頭として、南宋中期刊の皇朝文鑑やいわゆる衢州刊の三国志など宋刊本の補刻にしばしばあらわれるが、刊年の明らかな元刊本にもそれがある。

まず第一期のものと同名の刻工は、大徳四年（一三〇〇）の刊とされる大徳重校聖済総録二〇〇巻中の残わずかに三五巻[10]から、実に三〇名ほどもが見出される。前掲の刻工表のうちの○印を付けられたものであって、単字のものは必ずしも同じでない場合も多いから省いたが、匋と閏は「淵聖御名」を残すなど特異な例をもつ刻工なので含めた。△印は、大徳重校聖済総録に詹讓・任伴・汪恵老・李端・単侶とあるものとあるいは同一人かもしれないとして付けたものである。王栄と徐文がこれより二〇余年のちの泰定・天暦ごろの十行本十三経注疏や唐書にもみえるが、これだけ合致するものがいれば、およそ一三・四世紀の交の補刻と見当をつけてよかろう。一人の刻工の活動期間は数十年にわたるといっても、共通の刻工を多数動員できたのは、ほぼ同時期であったからに違いない。

一方、第二期の刻工は、至大元年（一三〇八）の刊と思われる六書統と六書統溯源[11]に同じ九人の名がある。＊の付いたものである。

周鼎は、後漢書の両期にいたが、大徳重校聖済総録と六書統との両書にもあらわれる。大徳と至大は接続し、それでいて後漢書の補刻には明らかに先後関係があるわけである。第二期修が至大中とは限らず、さらに一〇年ほども降るかもしれないにしても、きわめて近接した時期に二度の補修が行われたことに疑いの余地がない。ただし、年代が多少降るかもしれないこと、また、この二グループの刻工群は地域そのほかのことによって、あるいは年令差などもあって、大徳、至

大のころは大まかには分れていたらしいが、必ずしもはっきり二分するものでもないことが、泰定元年（一三二四）西湖書院刊・後至元五年（一三三九）余謙修の文献通考にみられる。この静嘉堂蔵本三四八巻首一巻は、明修を経ていて原刻葉の残存が少く、余謙修との差もつかないが、国立中央図書館金元本図録（図七七）によると、そこに採録された刻工名はなお一部のようであるが、第一期の刻工が二、第二期が一〇以上、そして補刊工というところに一期が一、二期が九人と顔をみせるのである。泰定のころには、両期の刻工がいっしょに雕版していること、しかし二期のものの方がはるかに多いということである。

なお、原刻や南宋中期修の葉を元代に修補するのは当然であるが、元代に補刻したばかりの版をすぐに改めたものが少くとも二〇葉、おそらくは三〇葉もあるのにはいささか不審の感もある。第二期の方には版心に双魚尾のものが多く、字様もさらに劣るが、巻六二第一一・一九葉、巻七五第三葉のように、おそらくは原刻の磨滅が甚しくて文字が見えないために、第一期修が隅の部分を墨釘のままに印したのを起して、それぞれの文字を入木したところもある。これらの元修版は、原刻とほぼ行格を同じくするが、とくに第二期修葉の小字双行の注文の字詰が異る場合が多く、原刻の残存葉との接続には葉末で調査して文字を合わせている。

史記、漢書も同じく元代の二期にわたる遞修本で、それは右の後漢書の結果と較べていっそう明らかになる。史記は模刻本と宝礼堂宋本書録によると、刻工名は両者にわずかに出入があるがほぼ同じで、第一期修の刻工として後漢書と合うものが周鼎・孫斌にすぎず、ほとんど第二期のもののようで、それが少くとも一五名はいる。漢書の静嘉堂本・北平本にみえる刻工は、単字のものを除いて、第一期四三、後漢書にないが大徳重校聖済総録にあって第一期とみなされるもの二、第二期八、いずれにも該当しないもの三七名ほどになる。なお、後漢書になくて史記・漢書にあらわれた元修刻工名を、一・二期を分つことはできないが、列挙しておく。ただし、単字のものを除き、大徳重校聖済総録にみえるものは〇印を付けた。

4仁木　方明　王阿得　王珍　王恭　王桂　王細孫　5包孫　石山　6羊青之　7何建　余諒　呉祐　李友文　李仲　李成　李頴
李璹　汪彦　沈元　辰一　8周元輔　周常　季文左　9洪寔　洪沢　茂之　10倪昌　凌顕　孫賓　徐俊　徐高　徐陳　徐経
高顕祖　11婁達　崔達　張乙　張田　張○成　張亨　張阿狗　張富　盛之　章文郁　許忠　陳明二　陳政　陳徳　陶士中　12恵通
黄戊　黄鎮　13楊采　楊青之　楊景仁　楊程　詹世栄　詹仲　詹仲亨　賈祚　14趙徳明　15蔡松　蔡松一　蔣三九秀　16銭成
17繆謙

この三史のように南宋前期の刊で同中期・元中期に再度と遞修された例としては、同じ九行の大字本で、百衲本二十四史に影印されたいわゆる眉山七史が典型である。原刻葉の残存はきわめて稀で、三史、とくに北京図書館の後漢書とは較ぶべくもないが、南宋中期修はやはり少いとして、それだけ元修葉が多く、その一・二期の刻工がともに頻出する。

同じような例は、たとえば中国版刻図録の解説をみれば、ここには各期の原・補刻が明示され、それぞれ代表的なものを数名づつではあるがその刻工名が掲げられているので、容易に左の一〇書を見出しうる。

経典釈文図版二四　説文解字図版二六・二七　爾雅疏図版三〇　国語解図版三一　揚子法言注図版三二
冲虚至徳真経注図版三三　唐書図版六六　周易正義図版六八　周礼疏図版七〇両浙東路茶塩司刊　春秋左伝正義図版七九・八〇慶元六年紹興府刊

このうち、(新)唐書は紹興七年ごろ、すなわち南宋初期の刊で、前期から補刻が始められてそれが一回多く、春秋左伝正義は南宋中期の刊で、補刻が一回少い。この解説は元修を二期に分けてはいないし、挙げられた刻工が少くてその双方がみえる場合は少いから、また各書が続いて補修の要を生じたとも限らないから、そこまで同一としなくてよいが、この解説が前七書をいずれも元西湖書院重整書目にみえるとし、そこでの修印とみなしていることは卓見である。

元の西湖書院は、至元中、宋の太学の故址に建てられ、その書目に著録された一二二種はおおむね南宋の国子監本で、これらを重整した書目であるという(呉昌綬後跋)。書名を列挙するだけの簡略な目録で、厳密にはこれらが同書であると

即断しにくいが、また逆に版刻図録では明記されていない周礼疏、春秋左伝正義も、書目の周礼注疏、春秋左伝注などにあたるかもしれない。両淮江東転運司刊三史は、史記が書目の大字史記であることはほぼ確実で、そうであれば両漢書もその東漢書、西漢書に他ならないであろう。さらに、南北朝の七史も著録されていて、これは宋元に別版のあることは知られていないから、明らかにいわゆる眉山七史を指し、また新唐書の名もみえる。これら元代の二期の刻工によって補修された諸書は、ほとんど元西湖書院重整書目に著録されていると思われるのである。したがって、この三史の元代の補修は西湖書院で行われたとみて、ほぼ誤りなかろう。

五　避諱欠筆について

避諱欠筆については各史ごとに提示したが、とりわけ後漢書が厳格かつ多種であることは、張元済氏が百衲本後漢書跋に一〇〇余の欠画字例を列挙し、また校史随筆の後漢書の条に避宋諱特厳の項を設けたとおりであったし、欽宗の桓字を「淵聖御名」、高宗の構字を「今上御名」とし、しかも孝宗の慎字を欠くなど、なかなか問題が多い。

まず、史記はかねてからこの御名の例が報告されていないし、模刻本にもみあたらず、一方、慎字の末画を欠いているから、淮南路転運使が刻版を命ぜられたのは紹興年間中であったが、それが過ぎて次の孝宗の代のおそらくはごく初期に完成したと推定するのが妥当というものであろう。

両漢書には淵聖御名、今上御名の例が多く、とくに桓帝、烏桓などに用いられる前者は頻出する。後漢書にはこれが三八、今上御名が五例も数えられる。そのうちの二例は元の第一期の補刻葉にあり（巻一五第二〇葉裏　刻工　匋・巻八九第三〇葉裏　刻工董）、また百衲本で原刻とみえる葉の二例が（巻一七第二八葉裏　刻工林康）静嘉堂本は元修葉で（刻工誠）桓字に改められている場合がある。

しかし、両字の大半は桓・構の末一画ないしは数画を欠いた形であり、その多くが他の諸字よりわずかに大きめでやや左に突出していたり浮いたりして、修正埋木したあとが歴然としている。淵聖御名あるいは今上御名のまま残されたのは、同じ葉でもやや見にくいところとか、双行小字の注文のなかにさらに四字の小字になっているものとか、いかにも訂正洩れという感が深い。

それとともに慎字の末画を欠く例も多い。これは次の孝宗の嫌名で構字の今上御名とは並存しないから、右の修正が行われたときに末画の点を削りとるだけですむ欠筆が施されたものと思われる。孝宗の初期の諱の瑗・瑋字もときに欠画しているが、例は少い。

これらについては夙に張元済氏が着目し、

桓字或作淵聖御名、構字或作今上御名、此二字亦有欠末筆者、大都就四小字原格剜改、且有多処剜而未補、遂留空格。是知刊版在南宋初年、而竣工之時已在孝宗受禅之後、故瑗瑋慎三字亦兼避也。（校史随筆 後漢書 百衲本後漢書跋もほぼ同じ）

といって、史記と同じように、紹興末に着手して隆興・乾道初ごろに完成したとみるのも、ごく当然な見解であろう。一方、この三史は南宋中期に補修を受けているが、このときにこの帝諱の数字については全巻にわたって手が加えられたと考えられなくもない。中期とは敦（惇）郭（拡）を欠筆する光宗・寧宗代（一一九〇～一二三四）ごろを指しているが、その刻工の活動期間としては淳熙一六年（一一八九）二月に譲位した孝宗の末期を含めてもさしつかえないから、慎字までの欠画ということもありうるのである。後漢書の淵聖御名と今上御名の存例は巻三から一一八に及び、桓字を修正埋木したらしい形跡もほぼ全巻にわたって見られるから、両漢書の雕版は紹興中に一旦は完成したと思われ、その修正は一時期をおいて行われた公算の方が大きいと考えられる。

以上きわめて冗長になったが、この稿のねらいは、紹興刊あるいは蜀大字本といわれてきたように刊年、刊地がまず問題であったし、宋刊本に例の多い宋元遞修の実態を明らかにするところにあった。史記の淮南西路転運司はともかく、前後漢書は淮南東路か江南東路か判断できないが、建安の刻工との関係も無視できない。南宋前期の建刊本は、廈金体の字様のものが多く、刻工名はほとんど刻されていないが、このことは建刊本に示唆を与えることになる。南宋中期の補修は各書各本とも葉数が少いが、おそらく国子監でかなり広範に行われたと思われる。元代の補修が二期にわたっていることが、後漢書の百衲本に用いられた北京図書館本と他本との対比で判明したが、その第一期修に墨釘の箇所が多く、さらに両期の修葉の校勘を厳密に行って、一口に宋版というものの、それぞれの修補によってその信度を分ける必要がある。その本文はまだ厳密な校勘を行うには至っていないが、とくに優れているということもないものの、南宋初期の官版であるだけに、三史それぞれにその一資料として貴重な存在ということになろう。史記は元修を経ているものの完本が二本あり、漢書は約三〇巻しか現存しないが、後漢書もわずかに六巻を欠く補刻の少い善本がある。三史にはいずれも宋版が七種以上存在するが、その校勘はいまだにほとんど行われていない。中華書局の標点本の史記は南宋慶元黄善夫本、漢書はいわゆる景祐本、後漢書はこの転運司本を底本としているが、対校に用いられたのは汲古閣本、武英殿本、金陵書局本などで、他の宋刊本は利用されるに至っていないのである。そのいわゆる景祐本と称されるものも、実はおそらく早くとも北宋末期の刊本であって、この転運司本をそれほど遡ることはなかろうし、すでに本文に一部異同をみるから、やはり対校の資料として重視すべきであろう。

三史は版本も多いだけに、この九行の大字本は堂々として文字も美しいが、それだけ版木の量も冊数もかさんで、版木は南宋の国子監、元の西湖書院、明の国子監と伝えられたが、明の南監ではあまり修補もされず、印行されることも稀であったらしく、伝本が少い。いわゆる眉山七史は同じ九行本であるが、七史に別版がないために、三朝本と称される明修

を経た印本が多いのと対照的である。

註

（1）趙万里・南宋諸史監本存佚攷（中央研究院歴史語言研究所専刊一　慶祝蔡元培先生六十五才記念論文集　上冊・一九三二年）。

（2）扉裏に「己未孟春呉興劉氏嘉業堂景宋蜀大字本」とあるが、巻首の王舟瑤の重刻蜀大字本史記序は「辛酉季秋」として、実際の刊行は民国一〇年にくだったと思われる。

（3）水沢利忠・史記会注考証校補（同刊行会・一九七〇年）巻九・三〇ページ〜。この校記は史記之文献的研究の単集解本の（五）史記集解一三〇巻（抄配）の条に載せられているが、その冒頭に紹興一四年刊と明記されているのは、非常に誤解を招きやすい。これは嘉業堂の模刻本のいう蜀大字本のことで、郡斎読書志を引いて眉山七史とは分けたものの、この三史の漢書を酉宋楼蔵書志などがやはり蜀大字本というのに惑わされて、次の註（6）に触れる賀氏の誤った一四年説をほぼそのまま踏まれたものである。嘉業堂模刻本が一六巻のこの蜀大字本（北京図書館善本書目の另一宋刻本）と一一四巻の淮南路転運司刊本（うち四五巻は宝礼堂本）とを取合わせて底本としつつ、景宋蜀大字本と総称するので、これに拠られた水沢氏も淮南路本を同じ条に入れ、後半に付説する形をとられた。

（4）京都大学人文科学研究所蔵本（三二冊）による。

（5）賀氏はこの模刻本についても一項を立てて解題している（史記書録・一〇二ページ〜）。

（6）賀氏の史記書録のうちに、史記集解残巻　南宋紹興十四年（一一四四）蜀刻大字本の一項をたててこれを解題している（六五〜六九ページ）が、先にも触れたように本記二巻列伝九巻しか挙げていない。板中に高宗の嫌名の構字を避けるが慎字は欠筆せず、書林清話にいう「紹興十四年有蜀刻七史」の七史のうちに史記も含まれるとして、大胆にも紹興十四年蜀刊の真本と断ずる。そして、毛氏汲古閣秘本書目に蜀刻残巻があるものを、後人が取って淮南路本の欠を補ったものかと想像している。ただし、嘉業堂の模刻本の王舟瑤の序に、淮南路本の大半もこれとおなじ蜀刊本であると考えて、官銜のある三巻（劉本）が南宋に至って淮南路転運司によって補刻されたとするのを、本末倒置であると否定している。

なお、この蜀大字本もしくは另一宋刻本は、堂々たる大字で、模刻本でみる限り慎字以下を欠画せず、宋刊本であろうとは想像されるが、刻工名の共通するものが他本にもなく、まして蜀刊であることの証拠の断片さえない。しかし、賀、水沢両氏の校勘によれば、他の集解本と同じグループに属するものの、史記板本のなかでもっとも優れたものの一つといえるという。

（7）竺沙雅章氏が漢籍紙背文書の研究（京都大学文学部研究紀

要一四・一九七三年）の明代紙背文書にこれをとりあげていられる（三七〜五一ページ）。この文書には両類あり、一は官印記のある巻宗刷尾、二は浙江温州・処州方面の丁口・田産の記録である小黄冊・黄冊図の類であって、明代里甲制についての貴重な資料であるという。

（8）趙万里氏は「史記為（淮南漕司所）刊、両漢当為江東（漕司所）刊矣」という（前掲・南宋諸史監本存佚攷）。

（9）長滝寺宋版一切経現存目録（文化財保護委員会・一九六七年）一〇〜一一ページ。

（10）大徳重校聖済総録残本（存巻六二〜八五・八七〜九四・九六〜九八）　宋徽宗勅撰　元中甫等校　大徳四年刊　三五冊

宮内庁書陵部蔵。同じく書陵部蔵の朝鮮写の完本二〇〇巻の首に、大徳四年二月一日集賢学士嘉議大夫典瑞小監焦養直の大徳重校聖済総録序があり、聖済総録が靖康の変などで遺逸したのが一部発見されたので、これを重校して江浙行省に刊刻させたという。これに続く一二名の列銜の中途には余白があって年代を欠いているが、経籍訪古志巻八（補遺）によれば、吉田氏称意館蔵の大徳四年刊本には、この官銜について「序篇末有大徳二年七月開読雕造中甫等三人官銜、及四年二月内畢工在局提調官梁曽等五人官銜」とあるから、これを大徳四年の刊本と断定してよい。書陵部本は江戸の医官多紀氏旧蔵。その残本三五巻からは、単字のものを除いて一六〇人ほどの刻工名を採録できる。また、国立中央図書館金元本図録には、同館蔵の巻五〇・五二・五三・一三一・一九一・一九四の六巻にみえる刻工名五〇が掲げられているが、ほとんど書陵部本のものと重複する。

（11）六書統二〇巻　六書統溯源一三巻　ともに元　楊桓撰　〔元至大〕刊〔至正三年〕修　明印。各一二冊が合帙　静嘉堂文庫蔵。六書統の首に至大元年の倪堅の序があり、ほぼこのころの刊とみてよかろうし、溯源もこれと同時または続いての刊刻であろう。問題はむしろ補修で、やはり六書統の巻末に「三年八月江浙等処儒学提挙余謙補修」の一行があり、かねて鉄琴銅劍楼蔵書目録はこの三年を元統（一三三五）としていたが、中央図書館の金元本図録の解説（八二ページ）が「按今伝本文献通考有至元又五年余謙修補跋、拠其跋文余氏於後至元初提学杭州、此処当是至三年」（一三四三）とするのが妥当と思われる。これは明印本で、一部に版面の汚損の甚しい葉もあるが、いま至大の原刻と至正の補刻とがほとんど区別できない。しかし、この両書、そして同じく楊桓撰で行格、版心なども極似して同期の一連の刊であることの明らかな書学正韻三六巻（静嘉堂文庫・内閣文庫蔵）の各巻首葉を、ほとんど茅元吉という刻工が彫っているが、これは原刻であろうから、これと対照すると大半は原刻葉で、補修はごく一部に施されたものと思われ、ここに掲げた刻工も至大のものとみてよかろうと考えられる。

これら宋元刊本の閲覧調査を快くお許しすくださった所蔵各位のご厚意に心からお礼を申しあげます。